

## 正課外での語学資格取得支援体制の構築をめざして

— 社会情報学科・経営学科における「TOEIC 勉強会」の実施 —

松村 博行

岡山理科大学経営学部経営学科

### はじめに

社会情報学科では、かねてよりファイナンシャル・プランニング (FP) 技能検定、統計検定、漢字検定など、正課外において学生の資格取得を後押しする取り組みを行ってきた。そのなかで、学生の中に英語の資格取得への潜在的なニーズがあることが明らかになったため、筆者は2015年度より学科学生を対象に TOEIC Listening & Reading Test の受験に向けた勉強会を開催している。本稿では、社会情報学科および経営学科におけるこうした正課外での語学資格取得支援にかかわるこれまでの実践についての紹介を行う。

### 1. 正課外における資格取得支援の意義

岡山理科大学においては、「実用英語 (TOEIC 対応クラス 600)」など、正課においても TOEIC Listening & Reading Test (以下、TOEIC) 受験に対応する科目が設定されている。社会情報学科および経営学科 (以下、当学科) の学生の中にも、これら科目を履修し、自身で TOEIC を受験する者もわずかながら存在するが、TOEIC に興味を持ちつつも、なかなか自分から最初の一步を踏み出せないまま時間を空費している学生が少なからず存在することが、学生との対話の中から明らかになった。

このような状況において、学科という学生にとって比較的身近な場所で勉強会を開催することで、潜在的に TOEIC に関心をもっている学生が気軽に受験に向けた勉強を始めるきっかけを与えることができるのではないかと考えた筆者は、2015年度より当学科学生有志を対象とした「TOEIC 勉強会」を開講している。

他大学では、学生の語学学習ニーズに対応するために、言語教育センターなどの部署が正課外の学習機会を学生に提供しているケースもある。今後、本学においてもいわゆる文系学生の増加によって、留学や就職活動に向けた高いレベルの語学力習得や語学資格取得のための学習機会を準備することが必要になる可能性もあるが、本稿において紹介する取り組みは、いわば「最初の一步」を躊躇している学生を対象としたイニシエーション段階のものである。

ちなみに、筆者の専攻は国際関係学、アメリカ経済論などであり、決して英語学や英語教育法の専門教育を受けたわけではなく、かつて TOEIC 受験のために集中的に勉強した経験や、学習塾や予備校で英語を教えた経験をもっている程度である。よって、筆者が学生に提供しているのは、あくまで初修者向けの勉強会であって、専門的な知識の教授は専

門の教員に譲ることは言うまでもない。なお、これまでの参加人数やその内訳は表1のとおりである。

表1 年度ごとの受講者数（単位：人）

	受講者 合計	受講者の学年内訳					2回目以上 の受講者	中途 脱落	
		1年	2年	3年	4年	院生			
2015年度	TOEIC 勉強会	13	7	2	4	0	0	—	1
2016年度	TOEIC 勉強会	10	4	2	2	2	0	4	1
2017年度	TOEIC 入門（春）	12	8	2	2	0	0	3	2
	TOEIC 初級（秋）	11	4	1	3	2	1	3	2
	英会話講習会	11	1	1	4	2	3	2	1

## 2. 勉強会の内容

勉強会は、TOEIC の運営を行う国際ビジネスコミュニケーション協会（IIBC）が出版する『公式問題集』およびその他市販の教材を用いて、TOEIC の特徴や解法、そして勉強法の指導を行っている。2015年度は11月15日実施、2016年度は1月29日実施の公開テストの受験を目標に、春学期と秋学期を通じて90分の勉強会を22回行った。これに加えて、外国人講師による英会話講習会を秋学期に10回実施した（後述）。2017年度については、春学期、秋学期を分割し、それぞれ「入門コース」「初級コース」と銘打ち、7月23日および1月28日実施の公開テスト受験を目標としてカリキュラムを構築した。

受講生には宿題として、単語の暗記とPart7の問題演習を2問ほど課している。単語は毎回最初に確認テストを行うことで定着度の向上を図り、またPart7については勉強会の最初の10分ほどをかけて答え合わせと解説を行っている。2017年度「初級コース」から、この解説を受講生に順番で担わせており、これによって解答を導き出すためのより深い洞察を行うトレーニングを試みている。

また、毎年勉強会の最初に『公式問題集』を受講生に配布し、これを最低3回は解答するように指導している。一般に「3回チャレンジ法」とよばれている学習法で、まず1回目は本番同様の制限時間で解答、答え合わせを行い、その時点での実力を確認する。そして日を空けないうちに2回目に挑むが、この時はどれだけ時間をかけても、あるいは辞書を使っても良いので、持てる力をフル活用して解答を行う。これにより、その時点での英語の総合力を把握する。その後に、解説を読みながら答え合わせと復習をじっくりと行う。そして3週間ほど開けて3回目の解答を、今度も120分の制限時間で行い、1回目との差分を確認するとともに、2回目の復習の成果を確認する。『公式問題集』には2回分の試験が掲載されているので、この1冊をやりきるだけで、初めてTOEICに触れる学生でも、TOEICの出題パターンをある程度知ることができ、頻出の表現や単語を一定習得することが期待される。

さらに、リスニング力を強化したいという受講生には、『公式問題集』を使ってオーバーラッピングやディクテーションを行うように指導している。

### 3. 家庭学習を促進する仕掛けづくり：e-learning の利用

初年度を受講生を見て気付いたのは、勉強会以外で十分に学習時間を割いていないという現実であった。毎回の宿題はこなしているが、「3回チャレンジ法」やディクテーションなどの地道な学習はほとんど手付かずだったことが判明したため、家庭での学習を促す仕掛けづくりが必要ではないかと感じた。

そこで、2016年度は、自学自習を支援する目的から e-learning の積極的な活用を構想した。具体的には、単語力およびリスニング力の強化を図る「コロコロイングリッシュ」(<https://www.colocollo.jp/>)、そして Skype を利用したネイティブスピーカーによるオンライン個別指導サービス「レアジョブ」(<https://www.rarejob.com/>) の利用を受講生に宿題として義務化した。なお、この試みは 2015 年度岡山理科大学教育改革推進事業に「e-learning を活用した資格取得支援としての TOEIC 対策講座の実施」として採択され、そこで得られた補助金を利用して上記 e-learning サービスを利用した。

コロコロイングリッシュは、一言でいえば目と耳と手を使って英単語を覚える学習システムである。受講生は、短文を利用して単語を覚える課題をクリアすると、「マイル」が付与され、このマイレージによって学習意欲を高める仕掛けが施されている。また、一度クリアした課題は、定期的に復習する必要があるが、復習していない課題には黄信号がとまり、さらに放置すると赤信号に変わることによって、受講者に復習を促す仕組みとなっている。

レアジョブは、フィリピン人の講師が全て英語で、独自の TOEIC 対策教材を用いた個別指導を行うものである。受講生は TOEIC 対策と同時に英会話のスキル向上が期待できるサービスである。

こうしたサービスを利用しつつ、学習時間の増加を図ろうと試みたが、残念ながらあまり高い効果は表れなかった。最大の問題は、受講生にこうしたサービスの利用を課したものの、結局、利用する学生としない学生の二極化が生じたことであった。これを解消するためには、その成果を定期的に確認する仕掛けが必要となるように思われるが、最後は受講生の熱意に依存するため、正課外で行う勉強会において採用することはなかなか馴染まないのかもしれない。

個別にみると、コロコロイングリッシュは 10 人中 8 人が「興味を持った」と答えたので、やり方次第では効果があるのかもしれない。またレアジョブについては、25 分間すべて英語で会話しなければならないことが初修者にとっては負担が大きかったようで、それが利用率の低下につながっていったと考えられる。

以上のように、e-learning の利用についてはあまり効果が見られなかったが、ここではその評価には一定の留保が必要である。というのも、せっかく教育改革推進事業に採択されながらも、2016 年度はその前後の年度に比べて、受講生の熱意があまり高くない年でもあった。そのため、今後は受講生が強く希望することがあれば、再び e-learning を利用してその学習効果を確認する余地もありうる。

### 4. ネイティブ講師による英会話講習会

筆者による TOEIC 勉強会の実施とあわせて、ベルリッツ岡山ランゲージセンターに所属する外国人講師による英会話講習会を実施している。講習会に要する費用は学科予算から支出している。当初、この講習会はビジネスシーンを題材とした教材を使用する、ビジ

ネス英会話の初級編という位置づけを行っており、TOEIC で問われるビジネスの現場の基礎知識を英語で指導することを目的としていた。同時に、ネイティブ講師との英会話を通じて、英語に対する関心を受講生が高めてくれる副次的効果も期待した。

講習会を担当するのは経験豊富なオーストラリア人講師で、2015 年度に初めて受け持ってもらった際、受講生から教え方ややる気の引き出し方がとてもうまいと大好評だったため、その後は同講師を指名して派遣を受けている。

2017 年度に関しては、少し仕組みを変え、TOEIC 勉強会の受講者以外でも英会話講習会を単体で受講できるようにした。また、内容も、それまでのビジネス英会話ではなく、受講生に英語でプレゼンテーションを行えるよう指導するものに変更した。この変更は、担当講師からの提案によるもので、前年の受講生を見ていて、積極的に英語で発信したがつているように感じたというのがその理由であった。この提案について、当初の目的とは異なるために少し悩んだが、それによって英語への関心が高まるのならばと考え、この提案を受けたという経緯がある。

全 10 回の講習会であったが、結果的に受講生 10 人が最後に 5-6 分のプレゼンテーションを行い、また他人にプレゼンテーションに英語でコメントを言いあえるまでになった。また事後アンケート（有効回答数 9）を実施したところ、「総合評価」および「後輩へのお勧め度」において、回答者すべてが 5 段階評価でもっともポジティブの「5」をつけた。

## 5. 今後の課題

以上、駆け足で社会情報学科・経営学科にて行ってきた TOEIC 勉強会のこれまでの実践内容について紹介を行ってきた。最後にこれまでの取組についての成果と今後の課題を提示したい。まず、成果としては、TOEIC の受験者の増加が挙げられる。大学で募集する TOEIC 団体受験を利用した本学科学生は、2014 年度は 0 だったのが、2015 年度に 20 名、2016 年度 11 名、2017 年度がこれまで 5 名となっている。これ以外にも、個人で公開テストを受験した受講生も、毎年、若干数いる。前述の通り、「最初の一步」を後押しすることが、ここまでは実現できていると考えてよいだろう。

また、英会話講習会は、毎年受講生から高い評価を受けていることから、学生に正課外の語学学習の良い機会を与えられているものとする。

課題については、より高いスコア獲得への取り組みや動機付けが必要であるとする。2015 年度受講生 12 名の最終的なスコアは最高 555 点、平均 445 点であった。また、2016 年度受講生 6 名は、最高 480 点、平均 374 点、2017 年度入門コース受講生 4 名は、最高 600 点、平均 392 点であった。20 回以上、英会話を含めると 30 回を超えるレクチャーの結果として、このスコアでは物足りないといえよう。

また、参加者の増加も課題である。筆者による勉強会はともかく、英会話講習会は学科から予算を支出している以上、より多くの学科学生に受講してほしいとする。とりわけ 2017 年度に行った英語プレゼンテーションは、学生に自信を与えることにもつながっているようなので、次年度以降はより幅広い参加者を募りたい。